明石の史跡（８８）一休禅師の人丸塚詣

壮年（血気盛んな年ごろ。働き盛りの年齢の者＝広辞苑）の頃、一休禅師（ぜんじ＝禅宗では、高僧をあがめる敬称／中村元著『仏教語大辞典下．８５４頁』）は、思い立つことがあったのか、京より山陽道をくだって、播磨の国をめざしたことが伝えられている。途中、摂播国境に近い一の谷（神戸市須磨区）にいたり、源平の運命をわけた古戦場をしのび、追悼の言葉を手向け、当地に一両日足を留め、その附近を残らず見て回ったという。

見学に時間を費やしたのか、日没がせまったために、途中で野宿となる。夜が明けて明石の人丸塚（現在の明石城本丸附近に所在）に参詣。懐から料紙（和紙）と絵具を取り出して、人丸の顔を描き、それに人丸を讃えた自賛（画中の漢詩）を入れ、塚に納めた。

その後、この人丸の画像が納められた宝蔵は、戦乱のために、「野伏あぶれもの」などの乱入により、その所在については不詳である（「塵塚物語１」『改定史籍集覧１０』１６－７頁）。

中世（室町時代）、人丸塚の西南西２．５キロ（直線）には、大徳寺領林崎荘が存在した。応仁の乱後、長享２年（１４８８）以前のある時期に、播磨を回復した山名政豊（宗全の孫）に、大徳寺から入国祝（青銅３００疋）がおくられた事実からも（拙稿「中世の泊と松江」『戦乱に揺れた明石』２５９頁）、一休禅師に象徴される大徳寺僧の明石入部の意味を、うかがうことができよう。

一休禅師の入寂は、文明３年（１４８１）１１月２１日。塵塚物語（ちりづかものがたり）の成立時期は、天文２１年（１５５２）との由（国史大辞典９．６７６頁）、その差７１年の隔たりがあるとはいえ、期待したくなるような話でもある。

日本歴史学会会員　　茨木　一成

人丸塚